

8 緒方章公裁譯稿「舎密便蒙」について

有 田 浩 和

(株) アリタ回生堂薬局

今般筆者は、イギリス・ヘンリー著、ドイツ・トロムスドルフ訳、オランダ・イーペイ訳、備中・緒方章公裁訳稿と記された写本「舎密便蒙」（以後便蒙と略す）についての内容と何時の時代に書き表されたかについて考察を行った。オランダ版原本については本来ならば、早稲田大学図書館蔵、故岡村千曳旧蔵本であるところのヘンリー著「化学入門」（一八〇三年版）（以後CBLと略す）をもって考証すべきであるが、幸いにもそれらを含めて原書の研究をなされた、「舎密開宗研究」（田中実他著・一九七五年講談社版）中の舎密開宗のオリジナルテキストについての坂口正男氏の論文から検討することとした。その結果おもな点を述べると一、CBLにおける化学親和力の特長である複親和図が「便蒙」にも記されており、その図は「開宗」の中

の図とも一致する。二、CBLの訳者イーペイの序の言葉が「便蒙」の下巻の末尾に章洪裁により完訳されている。尚、「開宗」には箕作阮甫の序文の末尾に一部分のみ訳されている。三、下巻「舎密便蒙之二」第一回鉍泉検査の中で「鉍泉検査以ニ蒸散ニ者」の項目の文中に、鉍泉ノ分析ニ精詳ヲ尽くスノ法則ヲ明ラカニ学ヒ知ラント欲セルノ徒ハ宜ク「ベルグマン」人名及ヒ「キルワン」人名カ鉍泉分析法ノ昼ニ就イテ之ヲ見ル可シ而レ凡此ノ小冊子ハ旅中及ヒ其他ニ於テ搬送シ難キ大部ノ書ニ代ヘンカ為メニ著述スル所ナルカ故ニ今又タ鉍泉検査ヲ蒸散ニ…この文章はCBLのさるなる原本であるウイリアム・ヘンリー著EIOC (An Epitome of Chemistry 一八〇一年初版)の序文中にこの出版目的のひとつとして書かれている鉍泉分析の注意書の文章と一致すると思われる。又訳文中「小冊子」とはヘンリーがいうところの初学者の入門書として携帯に便利なることを意味し、洪裁もまた原書に忠実に小さなハンドブック的な写本としての形態を留めている。その他種々の点で符合するところがみうけられるが、

ここでは書面の都合上割愛する。

「開宗」と「便蒙」の目次について比較すると、「開宗」の榕庵の序文中「原書一卷。分テ三篇トス第一編ハ元素ヲ標メ其集合スル物品ヲ論ス其第二編三編ハ試薬ヲ以テ雑合諸品ヲ分析シ薬品ノ真贋ヲ明メ鉍属ノ貧富ヲ辨シ龍圃ノ肥硃ヲ験スル等。第一編ト自ラ体裁ヲ異ニス故今私ニ第一編ヲ内篇トシ二―三編ハ修テ外篇トス原書開卷第一ニ初学ノ要領ヲ述テ曰ク器皿……」と訳されている。そこで初めに内編を検討すると「便蒙」では「舍密便蒙卷之一上 第一篇 総論此書ノ著ハ殊ニ初学ノ徒ノ師ニ從ヒ学フ……」から始まり「舍密便蒙卷之一下 第五動物酸」で終わり完訳されているが「開宗」では途中の卷十八蠅で終わっている。次に外編については「便蒙」では、舍密便蒙卷之二（下）鉍泉及ヒ山産物検査法総論続いて第一回鉍泉検査、第二回山物検査、舍密便蒙卷之三（下）論試験利用法至要者、第一回毒物検査、第五回試験種々ノ施用で完訳されている。「開宗」では第二回からは未完におわっている。次に何時の時代に書き表したかという件に関しては、

原書が手短な処にあるという環境と表紙の文様と備中緒方章公裁と名乗った時期等を勘案すると、坪井信道の塾に入門していた江戸修学の時期（一八三一―一八三五）に書かれたものと筆者は推測する。なお杏雨にある榕庵の原稿、舍密第一書植物篇一卷、舍密提要についても概ね便蒙と内容が符合せられる。

終わりにあたり「舍密便蒙」とは公裁が、初学者にも化学がわかりやすいように名づけた啓蒙書であり、「舍密開宗」は榕庵が榕庵らしく仏語で化学の根源への道を開くとして名づけたものである。当時の化学を志す蘭学者は、入門書のハンドブック的な物よりも体系的に集大成された「開宗」を求めていたであろうと容易に推察する事ができる。しかし、「便蒙」が CBL を完訳したという事実は評価されてしかるべきである。